ハシビロガモ

Anas clypeata

カモ科・旅鳥

ハシビロガモ（撮影：千嶋淳）

名前の由来
大きくて幅の広いくちばしをもつカモだからこの名がついた。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁（ガン）→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：嘴広鴨

形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス51cm、メス44cm。くちばしの大きなカモ。オスは頭部が緑色光沢のある黒、首から胸は白、脇と腹は栗茶色、くちばしは黒く、足は橙色。メスは褐色で黒褐色の班があり、尾は白っぽい。

類似種との見分け方：シャベル状の大きなくちばしが特徴。

ハシビロガモ

シャベルのようなくちばしが特徴

生息環境・分布

海岸の入り江、内湾、河口、潟湖、干潟、内陸の湖沼、河川、湿地、水田に現れ、特に海岸や沿岸の水系に多い。十勝には10～12月、３～４月に旅鳥として飛来する。

分布：ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地方に広く繁殖分布し、冬は両大陸南部とアフリカ大陸、中央アメリカに渡って過ごす。

日本には主に本州以南に冬鳥として渡来し、北海道では北部で少数が繁殖する。

北海道では旅鳥。河川や湖沼に生息する。夏にも少数見られる。

十勝にも旅鳥として主に春や秋に河川や湖沼に飛来する。

食性・他生物との関わり

プランクトンや小さな草の実を食べる。

配慮事項

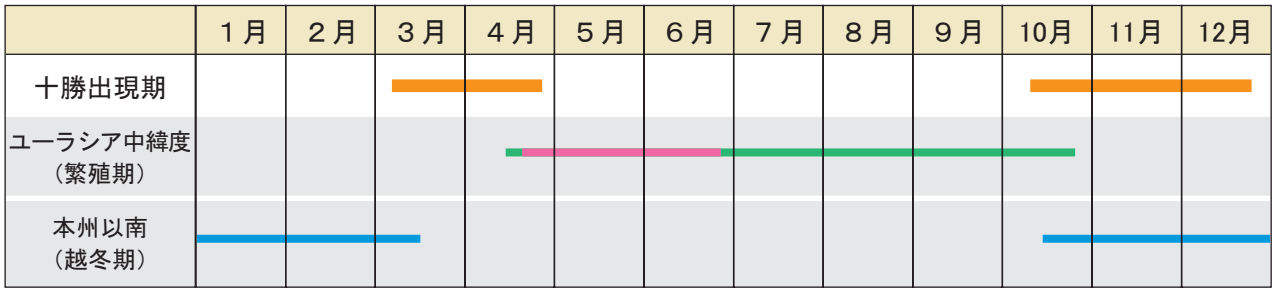
プランクトンの豊富な水域が必要。

興味深い話

■つがいの形成はオスの２～12羽ぐらいの小グループが水面の目立つところでグルグル泳ぎ回り、首を水中に入れ、小さな円を描いたり、大きく広がったりする事を繰り返し行う。そこにメスが１～２羽入っていき、一時的にでもつがいになるとオスはメスに接近し、相互に回りながら、水中にいれたくちばしをメスのくちばしに近づける。メスはオスのくちばしからもれる物を食べるようで、これは求愛給餌にあたる。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカプ＝水の中にいる鳥」という。

生活サイクル



参考文献

「山渓カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と渓谷社 1985（1995 ２版21刷）

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂２版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000

「野鳥ブックス－２ フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994 増補版７刷）

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004